

【投 稿】

父と母を偲ぶ

大 西 守

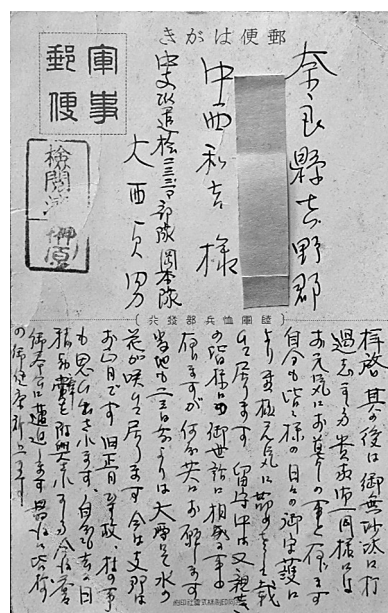
(根室支部)

父の古いアルバムから太平洋戦争当時、中国の戦地から故郷の親戚宛の古い軍事郵便はがきが出てきた。私の記憶では父の筆跡は見たことがない。祖父から聞いていたように綺麗な字であった。親戚への挨拶とお礼の後、「当地は2、3日前から大雪が降り水の花が咲いた様だ。支那は旧正月で村の事を思い出す。去る日、精励章を附与された。今後も益々(お国への)御奉公に邁進します。」とある。軍の検閲を受けている。

私の父、大西貞男は昭和30年代前半に42歳の若さで、大阪大学医学部附属病院で亡くなった。私は5歳になった幼稚園の1年目で、父の記憶はほとんど残っていない。微かな記憶は母と3人で温泉に行ったこと、病院へ見舞いに行ったこと、葬儀の時、会場の自宅周辺にしきび塔が100本ぐらい立ったことだった。父は戦後大阪市内で鉄工所を経営し、10人ほど人を雇い、取引先など交際範囲が広がったようだ。火葬場から自宅に戻ってきた時に、将来への漠然とした不安感を感じたことを少し覚えている。

父は大正前期に奈良県の林業と農業だけの山奥の寒村の家に生まれた。高等尋常小学校を卒業後、戦前のお阪市港区にあった、とある鉄工所で修業をしていた。太平洋戦争中、中国に3年ほど出征していた。戦後復員してすぐ大阪で土地を買い、鉄工所を経営していた。父は独立心旺盛で、事業の才覚があったようだ。30歳で厳しい大阪で事業を立ち上げることは口で言うほど簡単ではない。創業後、朝鮮戦争が起こり父の工場も朝鮮特需景気の恩恵を受けた。父は一族の出世頭であったため、父の故郷から多くの親戚が父を頼り大阪に来ていた。父は長男でたいへん面倒見が良く、母方を含め親戚、縁者で父の世話にならなかった者はいなかったようだ。今も精密機械部品製作会社を経営する叔父によると、父は腕の良い職人で、仕事には非常に厳しかったようだ。

父の死後、私は母親に育てられた。贅沢はできなかったが、食べる物にも困らず、大学まで卒業できたのは母と父のお陰である。私は父の死をほとんど意識せず、成人し社会に出た。と言うよりも、私の中から父の存在は



父直筆の軍事郵便はがき

ほとんど消えていた。私は昨年で父の享年より26歳も歳を重ねた。父は趣味人で何事にもこだわり、自宅の和室の造作、日本庭園、掛け軸、欄間額、写真が趣味であった。特に写真機はキャノンの一眼レフを所有し、たいへん上手かった。私は退職後、これらの趣味が父と一致し、同じ事をしていることに気づいた。好きな作家は中里介山、吉川英治だった。



自宅に飾っている実家にあった欄間と欄間額

父は戦争でたいへん肉体を酷使し、戦後も働き詰めに働いて、さらに新規事業まで考えていたと母と叔父から聞いている。今父の人生を想うと、父にしてみればやり残したことも多く、祖父よりも若くして旅立ったことはさぞかし心残りであっただろう。もし大日本帝国の昭和指導部が愚かな戦争をしなかったら、父はもう少し長生きし穏やかな晩年を送っていたと母がよく言っていた。

さて母のことも少し振り返る。私の母、大西やす子は、大正後期に大阪市内に生まれた。戦争末期、京都市に疎開

していた時期を除いて大阪市で暮らしていた。旧制家政女学校を卒業後、戦争中と戦後に旧協和銀行に勤めていた。一家を経済的に支えていたと叔母から聞いている。戦後すぐ父と結婚し、一女二男を儲けた。大正生まれの女性らしく真面目で働き者であった。和裁を厳しい男の師匠に習い、和服仕立ては職人並みの技能を持っていた。父と結婚後、会社の経理や工員の昼食作りまでしていた。母は父と対照的に健康に恵まれた。父の死後暫くして鉄工会社を叔父に譲り、和服仕立てをして苦勞して働き、一家の大黒柱として暮らしを支えてくれた。また今で言う財テクをしながら、3人の子供を育て大学までやってくれた。母は長女で性格は温和で我慢強く、面倒見も良く人から慕われていた。平成中期、84歳まで生きた立派な人生であったと思う。今、私が母に感心することは女性にしては生活力があったことである。母は国内旅行が好きで、北海道にも7回来ている。母の80歳の記念に有馬温泉で母の妹である叔母2人、我々姉兄弟が集まりささやかなお祝いをした時は大変喜んでくれた。母は我々子供には十分なことをしてくれたが、母には親孝行らしいことがあまりできなかったことを悔いている。

もし父があと10年生きていたら、母と私達姉兄弟の人生も大きく変わっていたと思う。しかし日本の戦後復興期に比較的経済的に恵まれた家庭に生まれ、育ててくれた父と母に感謝している。それと共に、一人の人間として考えたとき、たいへんな時代を苦勞し家族と日本の復興のために生きた二人の大正人を賞賛したいと思う。三木清は『人生論ノート』の「希望について」で「人生において何事も偶然である。しかしまた…何事も必然である。このような人生を我々は運命と称している。」と述べている。同著で最も印象深い一節である。人間の運命は本人の資質、努力や環境だけで決するものではなく、国家や時代などの大きな力に翻弄されるものであることを父母の人生を偲び、改めて深く感じた次第である。近年の日本の右傾化、言論の自由、政治は危機的状況である。以上の原体験からか、私の今の政治状況、憲法改正論議を憂慮しながら注視している。以上、誌面をお借りして私事と平凡な市民に過ぎない父母について述懐させて頂いたことを深謝します。